

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第38号 2001年1月1日

二十一世紀の高知県と歴史館

坂本 正夫

明けましておめでとうございます。

本年は平成一三年の巳年。そして西暦では二〇〇一年です。二一世紀の最初の年ということになります。二一世紀の高知県はどのような社会になるのでしょうか。

幕末から明治初期にかけて日本をリードしてきた高知県は、産業革命が進行しはじめた明治後期―ちょうど今から百年前の二〇世紀を迎えた頃―から後進地化が始まりました。これは山地が多い地形的条件から、近代交通(特に鉄道と道路)の発達が遅れたことが大きな理由でした。このことは基本的には太平洋戦争後も変わらず、産業は伸び悩み後進性を脱することができませんでした。そして高度成長期を迎えるのですが、この頃になると日本における高知県の後進地化が、県民にもはっきりと認識されるようになりました。

だが「歴史は繰り返す」とか「栄枯盛衰は世のならい」とかいわれますが、私たち高知県には「天与の風」が吹きはじめ、また春がやってきそうな気配です。というのは二一世紀のキーワードは「環境問題」だからなのです。そのことを具体的に、もっと広い地球的観点から考えてみましょう。

私たちが生きてきた二〇世紀は、ま

とに激動の時代でした。戦争と革命、破壊と再生が繰り返された百年でしたが、その間に科学技術は飛躍的な進歩をとげ、物質的には確かに豊かになりました。だが、一方では宗教対立、飢餓、環境破壊、効率主義による人間の喪失など物質中心社会のさまざまな矛盾が噴出した時代でもありました。

二一世紀の課題は民族や宗教の違いを超えて国際化し、人間と自然が真に共生できる社会を創り出すことだといわれています。

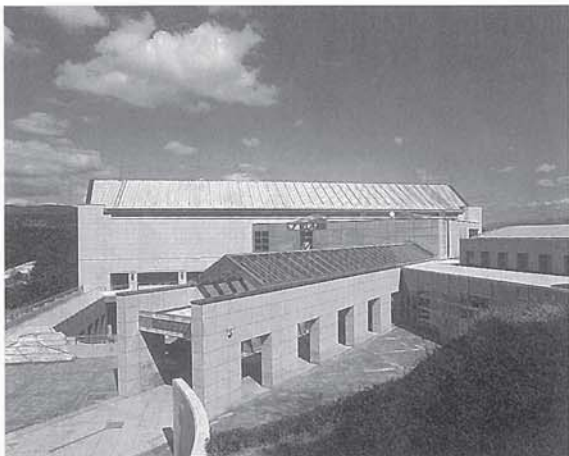
このような課題を背負ってスタートした新世紀ですが、私たちの郷土・土佐には二〇世紀的な負の遺産が比較的少なく、緑の山、きれいな水、青い海など豊かな自然が残っております。さらに豊富な経験と知恵をもつお年寄りがたくさんおります。これは私たちにあって、まことに貴重な財産です。今までのような効率第一の生活から、人間を大切に、人間と自然が調和のとれた生活を、という方向に生き方を転換することができれば高知県の未来は明るく、私たちはあの明治維新の時のように、またトップランナーの一員として日本をリードすることができるだろうと思います。

それでは新世紀を迎え、歴史館はどのような役割を果たせばよいのでしょうか。

歴史館のあり方についてはいろいろな面がありますが、ひとつは土佐の歴史・考古・民俗を研究し、これらに関連する諸資料を収集し、保存して後世に伝えていく県民のための施設である、ということです。学芸員を中心にアカデミックな調査・研究をして県民の財産をつくり、これを保存していくのです。

第二には、そうした調査・研究の成果を展示や紀要、講座、講演などによって県民の皆さまにお返ししていくことです。

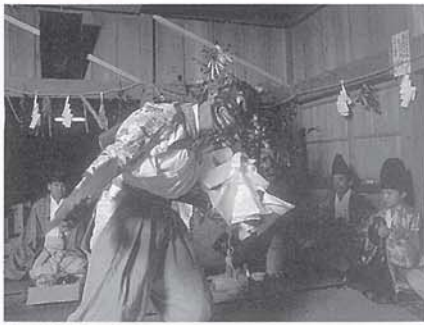
第三には県民の生涯学習活動(家庭教育・学校教育・社会教育を含む)の拠点のひとつの施設である、ということです。歴史館は、私たちが土佐の過去を知ることによって、現在の生活を見直し、未来の土佐を考えるための施設なので、できるだけ多くの県民に気軽に來ていただきたいと思っています。



海と山の国で

—高知県の民俗資料の収集—

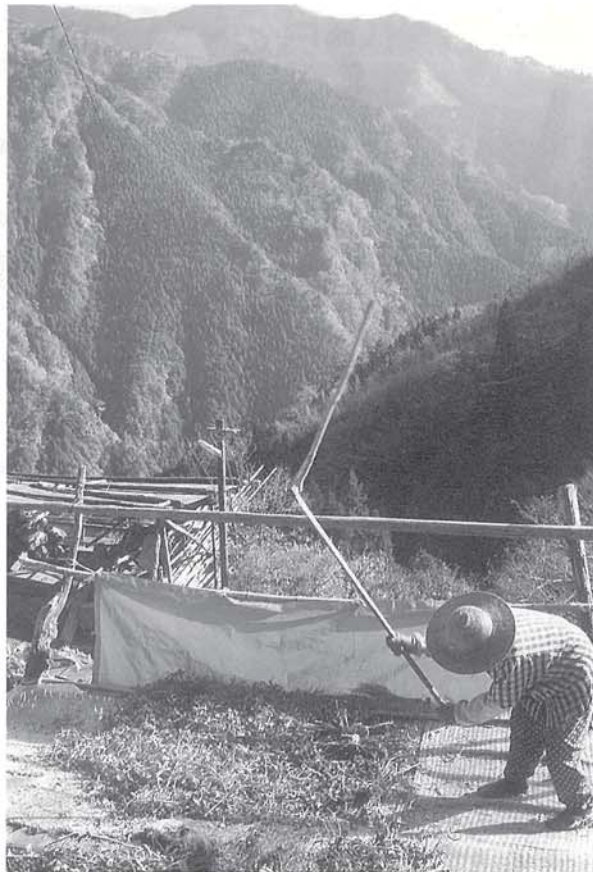
梅野
光興



本川神楽。県内の民俗芸能も変貌しつつあり、古様を残すものは貴重である。



おばあちゃんの見た山村の80年」展示会場を「おばあちゃん」春子さん(左)が訪れた。娘さんの中川幸子さん(中)・当館の坂本館長と(右)。



池川町椿山にて。カラサオを使って豆を落とす。21世紀の今でもこのような生活が残されている。

歴史民俗資料館が開館して、早いもので今年で十年になる。館の民俗部門では、開館前から県内の民俗資料の調査収集につとめてきた。これまでの成果を振り返り、今後の課題を探る。

ものである。この企画展で面白かったのは、来館者の方の感想に「昔を思い出した」「なつかしかった」など展示内容を自分のこととして共感したものが多くことである。展示は、物部村岡ノ内の宗石春子さんという八〇才のおばあちゃん一人に焦点を絞り、春子さんの思い出話をパネルにするなど、個人的な記憶や経験を重視したものである。ところが、ある世代より上の来館者の方の多くは、春子さんの体験を自分のこととして展示を見てくれたようである。

◆深い山々の国
私がはじめて高知県の山間部の風景を見たのは、大学受験のためにバスや鉄道で、愛媛県との県境の山々を通過したときのことであった。夜の山々に人家のあかりが点々と散在し、「こんな山奥で人はどのように暮らしているのだろうか」と思ったことであった。そして、そのあかりのひとつひとつの元にある人生を知りたい、と思った。

ということは、岡ノ内に限定した展示であったが、内容は土佐の農山村一般に通ずるものがあったということだろう。岡ノ内は、水田もあるので、平地農村に共通する所も多いのである。

それから何年かして、歴史民俗資料館の開館準備の仕事にたずさわることになり、実際に土佐の山間部をそちこちすることになった。

次の段階としては、稲を作れない、より急峻な地形の山村の暮らしについても知りたいと考えている。幸い、高知県は日本でも遅くまで焼畑農業が残っていた地域で、特に池川町椿山は、記録映画や複数の調査報告が刊行されて有名である。その一方、椿山においては民具に絞った調査は未だなされていないようである。当館の坂本館長、中村、梅野は高知女子大学の中山間調査に参加し、同大の橋尾直和氏とともに椿山の民具調査を試みたが、できれば岡ノ内に続いて、稲を作れなかった焼畑の

四国山地の山は県外から来た私の目には大変急峻な、けわしい、そしてスケールの大きな印象を受けた。平地からすぐ山になり、その山と山が幾重にも重なり奥深いのである。そして驚くことに、その奥深い山々のいずこにも人の暮らしがあるのであった。

常設展の中でも山の暮らしにふれているが、現在、二月一八日まで開催中の企画展「おばあちゃんの見た山村の八〇年」は、その山の人の生活を知りたいという願いをようやくひとつ達成した

ものである。当館の坂本館長、中村、梅野は高知女子大学の中山間調査に参加し、同大の橋尾直和氏とともに椿山の民具調査を試みたが、できれば岡ノ内に続いて、稲を作れなかった焼畑の

村の生活資料を明らかにできたらと思
っている。

◆黒潮の海の文化

他県の博物館を見ていると、その地域
の特色に焦点を絞った展示をよくみか
ける。東北ならいずれも縄文、青森はリ
ング、未見だが新潟は雪、それぞれ、そ
の地域のイメージを物語るものである。
では高知県の生活文化の特色は何だ
ろう？

やはりクジラとカツオだろうか。土
佐には黒潮洗う海国のイメージが強烈
である。

かなり以前に「クジラ文化を紹介す
る施設が無い」との声が新聞に出たこ
とがある。その後だったか、当館では
「鯨の郷・土佐」と題し、土佐のクジラ
文化を紹介する企画展を行ない好評を
得たが、平成八年、室戸市吉良川にキラ
メッセ室戸鯨館ができ、クジラについ
てはまとまった展示がいつでも見られ
るようになった。

カツオについては、中土佐町が「土佐
カツオ漁業史」という研究書を準備中で、
博物館施設の構想もあると聞くが、今の
所県内にカツオ博物館は存在しない。

カツオ以外の漁法も含めた土佐の海
村の仕事と暮らしとなると、なおさら資
料は集積されていない。高知県には、山
間部には大正、檜原、仁淀、大豊、馬路な
ど各地に充実した民俗資料館があるの

だが、さて海となると、前に述べたキラ
メッセ鯨館以外にまとまった博物館・民
俗資料館は見当たらないのである。

これは、家が狭く収納場所の少ない
漁家では、山や平地の農家と比べて道
具を保存しておく傾向が弱いとか、漁
業の動力船化や機械化が山や里の暮ら
しの機械化より比較的早く、そのため
昔風の道具がより早く無くなってしま
ったとか、台風常襲県のため、道具や船
が度々流されてしまったなどの理由も
あるかもしれない。

しかしながら、海国のイメージをも
つ高知県にあって、その海の生活文化
を語る資料が無く、県外の人や高知の
若い人たちに向けてその風土と生活を
伝えていくことができないとすれば、
恥ずかしいように思う。他県の例では、
たとえば香川県では瀬戸内海歴史民俗
資料館があり、土佐の船をふくむ数十
隻の瀬戸内海圏の船を収蔵し、三重県
の海の博物館では伊勢・志摩の漁労用
具や船を巨大な収蔵庫で保管してい
る。それに対して当館では、念願の海
の和船をようやく昨年一隻収蔵したと
ころで収蔵場所は満杯になり、次の和
船の収蔵の見込みはたっていないので
ある。

もちろん前に述べた理由で海の生活
道具の収蔵は困難かもしれないが、た
えば海辺の村の神社にかけられてい

須崎市野見湾の網船の収蔵風景。
海の木造船の収集は宿願だった。



鯉の一本釣り絵馬(複製) 中土佐町矢井賀 大神宮社蔵
動力化により漁の姿も大幅に変わった。海辺の神社にかけられた絵馬は、当時の様子を知る
ためのビジュアルな資料として貴重だが、所によっては剥落・劣化が進んでいる。

る当時の漁の風景を描いた絵馬などを
調査することによって、その村の漁業
の変化を知ることできる。そのよう
な調査も、遅ればせながらの漁業史の
調査のためには必要なものだと思う。
◆さらなる資料調査を

当館では、昨年度から収蔵資料の整
理を臨時職員の手を借りて行なってい
るが、現在約三千点の資料がこの十年
間に集まっている。その中には四万十
川など県内河川の漁労用具、船大工用
具、葬送用具、民家のお札など特徴のあ
るものも含まれている。

とはいえ、まだ高知県の特色を示す
資料のまとまった収集はできていない
し、その前提となる調査がこれからで
ある。収蔵資料の整理には早急に一段
落つけ、県内の資料調査収集の旅に出
発せねばならない。
急激な生活の変化によって民俗資料
は失われようとしている。今日もどこ
かで貴重な民具が捨てられているかも
しれない。時間は無いのである。この
ままでは便利ではあるが画一的な世界
に飲み込まれて、私たち土佐人の自画
像も見えなくなってしまうかもしれな
い。その前に、けわしい四国山地の
山々や黒潮洗う太平洋の海と格闘して
きた私たちの祖先の足取りをたどって
みたいと思うのである。

鈴木一義さん



鈴木一義さん(昭和三十三年生まれ、国立科学博物館理工学研究部主任研究官)は、日本の科学技術の発展過程を研究されており、著書には『技術史の位相』(共著)などがあります。平成十年に当館が開催したからくり展では、顧問として企画段階からご指導いただきました。

鈴木さんは学生時代から技術の歴史に興味があったそうです。社会に出て技術者になろうと思っていた当時、技術の進歩が引き起こした公害などの問題に對峙して技術者の責任というものを考え、近現代の技術者が行なってきたことを検証することに取り組まれたとのこと。

平成一二年八月二〇日、こ来高された鈴木さんに近代化遺産(近代化産業遺産)のお話などをうかがいました。なお、近代化遺産とは、明治以降の産業や交通、土木の構造物などのことで、近年まで文化財としての価値が認識されていなかった近代の文化遺産です。

近代という記憶

かつては物が少なかったですからね。ある物をどう使い続けるかということが、リサイクルに繋がっていました。物が壊れても何かに使おうと、とりあえず取っておいたものです。

同じ物を長く使うことがひとつの美德であり、必然的に物は大事にされました。自給自足でお金がなくても生活できていました。

しかし、日本は、近代になってアメリカと同じような消費型の社会に変わりました。ここ二〇、三〇年で物がどんどん作られ、私たちの生活が急激に変わってきました。一代で激変したので、ひとりの人間の記憶の中でも薄れつつあります。近代の物をきちっと残さないことには、日本という国は記憶喪失になってしまいうでしょう。

近代化遺産というのも、近代の物が大事だということではないのです。近代の物を残して、それを記録して次の世代に伝えないと、記憶喪失のままに二一世紀を迎えて、同じような生き方ができますか?ということなのです。

それが良いことだったのか、悪いこ

とだったのかも含めて、やってきたことの記憶なのですから。私たちは近代という記憶を失ってはいけないんです。

私は、日本人というのは歴史を教えられる必要がなかったと思うんですよ。国境を接している国々は、歴史をきっちり教えておかないとその民族が無くなりかねない。しかし、日本は海に囲まれているからよその国から攻められることが長い間なかったでしょう。

そうした危機感がなく変化が緩やかだったから、親子孫と三代いてお寺もあって、教えられなくても自分の家や町の歴史が自然とわかっていました。ところが明治維新以後、急速に町も人も変わってきました。

歴史を教えられなくてもいい時代は過ぎてしまったんです。近代のことは特に危ないですね。今、残そうとしなければ日本人の記憶の中から近代は欠落してしまいます。

しかし、近代はまさに西洋との出会いの時代ですから、そこが説明できないことには国際人として世界に出ていけないでしょう。

江戸時代に連なる近代化遺産

私は、江戸時代を無視して日本の近代は説明できないと思うんです。日清日露の戦争に勝ったときに、欧米は「日本人は奇跡を起こした」と言ったんで

すね。欧米では奇跡を起こすのは神様ですから、私たち日本人が狡をやったとみなしたんです。

私たちも、欧米からミラクルと言われるような近代をどうして起こし得たのかをきちんと言明せず、ものまねとか借り物と言われたまま過ごしてきました。廃仏毀釈でもそうですが、在来ものを捨てて乗り換えた、まねでもないじゃないかという形でやってきたんです。

しかし、近代化とは、決して在来のものを無視して行なわれたものではなく、在来の延長上にあるものなのです。

在来と言えば、土佐では紙もそうです。紙を扱う昔からの技術体系が、現代に新しい花を咲かせているのです。何にもないところに花は咲きません。まず土壌があって、そこに芽が出て、オリジナリテイのある先端技術になるわけです。

そこをきちんと言明しないと、ミラクルやものまねという言葉方は覆せません。そこを証明するのが、近代化遺産であり、ひいては私たちが江戸時代の日本人の能力をどう見るかなのです。自分たちがやってきたことを形としてみせるために、近代化遺産は非常に重要だと思えます。

もちろん、ものまねもあります。当時の日本の限界は、確かにあるのです

から。限界は限界と認め、教わったところと自分たちが伸ばしたところをはつきり分けて自分たちで自覚していくことも、近代化遺産を後世に残していく目的のひとつだと思いますね。

隣の異なる文化圏

近代化遺産をよくみていけば、その地元でしか根付かない産業しか根付いていないんですよ。長い歴史の中で、伝統の中で培われてきて、出るべくして出てきているんです。

人や風土、いろんなものがここにあって、ここじゃなきゃ駄目だったという、そういうことを私たちは知らな過ぎるんです。だから簡単にもそのままで東京を目指しちゃうんですね。

もともと文化なんていうものは、異質なものがぶつかり合ってできるんです。ぶつかり合い、摩擦がおきることで発展し洗練されていく。同質化したら摩擦もおきないし、刺激を受けずには何も生まれません。同質のものがいくら付き合ってたって、だんだんおかしくなっていくだけです。

私たちは異なる文化圏をもっているべきなんです。そのためには「おらがむら」「おらがくに」のイメージをもつて、そこに自覚と自信をもつことだと思います。

実際、かつてはそれぞれが異なる文

化圏をもっていたんです。それが近代になってどんどん均質化されてひとつの文化圏になってきた。でも、基からじっくり見ていけば異なる文化圏はちゃんと残っているんです。

おらがくにの「からくり」

新居浜の話をししましょう。昭和四八年に別子銅山が閉鎖になって企業は撤退していきました。町がどんどん寂れてきて、新居浜に誰も魅力を感じなくなりまして。けれども町を愛する人たちにはいるわけです。彼らは何か無いかと考えた。そして別子銅山を再発見し、それは自信に繋がりました。

江戸時代の日本を支えたのは新居浜の別子銅山だったわけです。日本最大の銅山で、世界の産銅量の三分の一くらいは、ある時期あそこから出ていました。そういうことをもつと自覚して、自分たちの誇りにしよう。こどもたちに教えてあげれば、そういう町だったという自信がもてる。

そうした自信は経済の活力にも結びつきます。自信のない経営者に先はないですから。新居浜の場合、市民と経済界とが先に結びついて行政が後押しをする形でした。

土佐で言えば、からくりでしょう。

そして、からくり半蔵研究会の垣内さんのような人ですね。垣内さんは

土佐のからくり半蔵のことをこどもたちに伝えたいと願った。「私たちのあとを継ぐのはこどもたちだから」ということですね。からくりはロボットへと連続しています。

土佐にからくりという下地があった、最先端の技術ができたことの自覚が大切です。からくりも、今意識して教えていかないと、後の世代にはなかなか伝わらないと思います。

からくりみたいなものに自信を持つことが歴史をやることの意義のひとつです。「おらがむら」でいいじゃないですか。地方自治というのは、文化からしか始まらないと私は思っています。もちろん文化だけでもないですけど、自分の地域が自慢できるものをたくさんもっていることで、地方自治はうまくいくと思うんです。

どんなものでも結合と離散を繰り返しますね。地方自治の時代になり、日本はふたたび分散をはじめています。同じところにはもどらないんだけど、何も無い大海に出るのではなくて、歴史の中で検証してこれからやっていくべきでしょう。そうやって着地点を探すことが、自分たちに一番あったものを選択するための賢い方法ですよ。

博物館の役割

書かれたことに具体性を与えて実証

するのは物です。その点、これまでたくさんのお物を集めてきた博物館が果たすべき役割は、ますます大きくなっていくでしょう。

かといって、物だけでも駄目ですね。物に伴う情報をあわせて収集することも、博物館の大切な役割です。

近代化遺産も今のところ建物や土木構造物といったハードだけですが、今はハードに伴うソフトを残す方法がないかなと思っています。

ソフトとは、例えば技といったものです。本を読んでも紙は漉けませんね。やってみて体得していくものです。それは技術でなく技だからです。技術は言葉で書けますが、技はなかなか書けるものではありません。では、どうやってその技を伝えていくのか。

私は、「型」と言っているのですが、茶道でも何回も繰り返すことによつて、技に至ることも、侘び寂びを意識できるようにもなるじゃないですか。日本人は洗練された型の世界を作りました。紙漉きなどの技に型ということが言えるのかどうかはわかりませんが、何らかの形でそうした技を伝えていくことが必要です。

私たちは、映像という方法を含めて、技といったソフトを伝える方法を考えたいと思います。

(聞き手 中村淳子)

速見市次郎のはがき

—寺石正路資料から—

野本 亮

当館の二大コレクションの一つに、郷土史家寺石正路の資料群がある。現在書籍の三次分類を終え、それ以外のジャンル別資料カード作成を随時行っている。

今回御紹介する史料はこの一連の作業のなかで発見されたもので、「杜山土佐旅行記念画葉書 二」に挿入されていたものである。

寺石の東京遊学時代の交友関係については平成十年度企画展「土佐・郷土史の父 寺石正路の足跡」において図示したことがあるが、同郷人のなかでもとりわけ速見市次郎との交流については、全く予想し得ない新知見であった。

速見は、土佐郡石井村（高知市）の士族速見儀内の次男として文久三（一八六三）年に誕生した。早くから学問・人格に秀で、民権政社「嶽洋社」でも秀才としてその名を知られていた。明治十六年ごろ土佐を出て各地の自由黨員を訪ねて政治活動を展開している。

自由民権運動に関しては一貫して距離を置いていた寺石との接点は、趣味の漢詩と東京にあった。

寺石の日記「燈下與児談 上」にはこの速見との出会い・交流について次のように記されている。

「余が東京遊学中交を訂した友人の中に速見市次郎といふ人があった。氏は余よりは三、四歳も年長で、元来同等の交際をなすべき柄ではなかったが、余が宿元の岡崎家に親戚川村喜明といふが折々参つた事がある。速見はもと此の川村と友人であつて、川村を尋ねて此の岡崎家へ参つたものである。そして後には余も時々之に出逢ひ言葉を変へたがもとで後には極めて別懇となり、月には数度も遊びに参り、又後には余に英語を教えてくれといふて、余はウィルソン讀本の巻一を半分も教えてやった事があつた。

此の速見氏は、一風変わった人で、顔色蒼白で言語も穏やかであつた。其ほんやりと身体の太つていた様は正岡子規に似て居る。漢学の才はあり、詩を能くし、兎に角俗を脱して居た人であつた。氏は当時牛込の萬松院というふ寺に寓して居た。略し速見氏も詩は得意で、時々余に示された。その中余が

記憶せるもの左の通りである。

舟下澗江望天王男児諸山
一帯長江一葉舟。柳湾葭浦水悠悠。
人間為客又多福。飽見名山下碧流。
以下省略

速見市次郎らとの漢詩を中心とした交流は、遠く故郷を離れて苦学していた寺石にとって一種のカンフル剤となつていたに違いない。

その後、寺石が病を得て帰郷（明治九年）したため二人の関係は途絶する。この葉書はそれから約六年後に速見より発せられた獄中葉書である。

全国一斉武装蜂起による専制政府打倒のため、数々の非合法活動を展開した速見は、明治三年に逮捕、二七年名古屋控訴院で重禁固刑五年の判決を受けた。若き日の寺石を「ミルトン」と称したり、拘禁中にもかかわらず、「幽栖相楽居候」と記すなど、随所に人間速見市次郎の実像がにじむ。速見獄死（明治二年）後、寺石は純粹に彼の死を悼み、また青春のよすがとして本史料を大切に保存したのである。



14.0×9.0cm

高知縣高知市九反田三三
寺石正路殿

大阪監獄署勾置□□
刑事ヒ告人
速見市次郎

借問、故山の隠君子別に御支障も無御座候や。××××願ル御無沙汰申上候多罪ナリ。曾テ共ニ京城ニあり禪詩ヲ論ゼシ當時ヲ思ハ轉る懐旧の情ニ不堪候。足テ亦然ヤ不然ヤ、足テ大ニミルトン先醒然ノ奇癖ハ絶高絶妙ヲ極メシなるベシト思フ。然ニ尚御近状御聞セヒ下度候。偕テ先頃御隣ノ川村嘉明氏ニ書ヲ以テ要事ヲ依頼シタルモ、凡テ返事ナシ。少々至急ヲ要ス。同氏ハ今是在宅ナルヤ否ノ所課、餘御一封相煩度は非願上候。余ハ幽栖相楽居候。御安心ニ。

註(1) 寺石正路のこと。

(2) 東京を指す。

(3) John-milton (1608-74) 英国の詩人。叙

詩の大家。
(4) 世の喧嘩を避け、静かに暮らすこと。

こんにやく作りに参加しました

カルチャーサポーター 北添 綾

今回、私達カルチャーサポーターは、子供達と一緒にこんにやく作りに挑戦しました。

前日の準備では、薪と釜を使ってこんにやく芋を煮たのですが、約八キログラムを煮るのに六時間程かかり、熱いやら煙たいやらで大変苦労しました。

次の日、子供達を迎え、まずはこんにやくの命「灰水」作りです。いろりの灰に湯を注いで漉すのです。

それから皆でゴム手袋をしてこんにやく芋の皮をむきました。子供達はこんにやくがこんにやく芋からできていることを今回はじめて学んだようです。

次にこんにやく芋をつぶして灰水を入れます。子供達は灰水を入れることにびっくりしていました。ここでこんにやく玉を作るのですが、子供達はこれが一番楽しかったようです。ドーナ



臼と杵でこんにやく芋をつぶすところ

ツツ型やハンバーグ型など色々な形のものを作っていました。

こんにやく玉をゆがく間、子供達は民家でいろりにあたったり、探検したりしていました。皆でいろりを囲んで

いると、おばあちゃんの時代にタイムスリップした様な感覚がして、独特の雰囲気心地良い気分でした。出来上がり皆で食べました。おばあちゃんの時代は、家で日々の生活の中で作っていたこんにやく。昔の人の暮らしと食文化の発想の奥深さにとても感動しました。

参加した人々は、知識だけでなく実践することで、手の感触や匂い、味わいと共におばあちゃん展の原点をうかがい知ったのではないのでしょうか。

私達のおばあちゃん達が培った生活の知恵は、その又昔のおばあちゃんの暮らしがあったから。私は奥深い昔の知恵をできる限り数多く知りたいし、やってみたいし、次の世代に教えてあげたいと思いました。最後に今回の歴史教室に関わった方々へ。お疲れさまでした。ありがとうございました。

中高生職場体験 今日私も学芸員

八月二十三日から二十六日までの四日間、歴史民俗資料館にわいの学芸員がやってきました。

高知東高校一年生

村上琴乃さん

田内愛弓さん

城北中学校三年生 一宮中学校二年生

上杉類君 山地達也君

吉村一平君 岡村慎吾君

宮地俊幸君 立石光君

田井宏明君

以上、九名の高校生・中学生が博物館業務を体験しました。

高校生の職場体験は三日間の日程で行われ、館内外にわたる業務を体験することができました。その体験を紹介したいと思います。

初日、歴史館の概要説明、館内の見学を終え、受付の業務に就きました。初めての接客の仕事にかなり緊張したようですが、解説員さんから「緊張せず、リラックスしてネ」という言葉をかけてもらい落ち着いて受付業務でできました。

二日目は、バックヤードで資料のカード作り、民俗企画コーナーへの郷土玩具の展示と学芸的な業務を行いました。

た。初めての生の資料に緊張したみたいですが、展示のレイアウト、キヤプションづくりと二人で協力して作業をこなすことができました。最終日は味元家周辺の草引きです。歴史館は岡豊山歴史公園の管理も行っており、真夏の暑いなか公園管理の小松さんに指導を受けながら館外の業務を体験することができました。



高校生二人の展示資料です

以上、高校生の三日間の報告ですが、学校を離れた社会経験は、これからの学校生活を過ごすうえで有意義な経験になったと思います。

この職場体験で中高生から寄せられた感想の共通していた点は「歴史資料に直接触れることができ、貴重な経験ができた。」ということでした。

歴史館に対する新たな視野を開けたのではないのでしょうか。是非、学芸員を目指し、歴史館に戻ってきて欲しいものです。

泉 誠司

平成13年1～3月の催し物

民俗講座 14～16時 ※はがきで申込

- 1.13 民俗講座②「民具と方言」
- 1.27 民俗講座③「岡ノ内の民具」

子ども歴史教室 14時スタート

- 3.10 土佐民話の家⑥
市原麟一郎さん(土佐民話の会)

展示解説 14～16時 ※はがきで申込

- ▲ 3.24 「居徳遺跡展」展示解説

図書販売情報

※平成12年12月現在

書 籍 名	価格(税込)	送料(1冊)	重量(g)
常設展示図録	1,000	310	365
総合展示図録(日生)	800	310	310
企画展図録 寺田寅彦	1,000	310	255
企画展図録 死と再生の文化	1,000	340	600
企画展図録 城田コレクション	600	240	235
企画展図録 いざなぎ流の宇宙	1,500	340	600
企画展図録 歴史と美術—維新の群像—	600	310	255
企画展図録 昔のくらしと道具—大津民具館の資料から—	1,000	310	365
企画展図録 土佐・郷土史の父 寺石正路の足跡	1,000	310	330
企画展図録 田辺寿男の民俗写真—はくらの村は山をおりた—	1,500	340	600
企画展図録 土佐藩主の装い	800	240	190
企画展図録 道具が語る食の文化	500	240	160
企画展図録 記された歴史のメッセージ	1,000	310	235
企画展図録 近世 土佐の砲術史	1,200	310	280
企画展図録 おばあちゃんの見た山村の80年	900	240	240
特別展図録 考古速報展'96	1,528	340	550
特別展図録 秀吉と桃山文化	2,000	450	1,250
特別展図録 からくり—夢と科学の世界—	1,200	310	430
図 書 ものがたり考古学	2,854	380	750
図 書 土佐歴史の遺品 I	998	240	170

■郵便振込先 口座番号 01690-2-61369
加入者名 (財)高知県文化財団

開館10周年関連企画展「居徳遺跡」 2001(平成13)年3月16日(金)～5月13日(日)



土佐市高岡町の居徳遺跡群は、集落本体は確認できていませんが、集落に隣接する谷の斜面堆積層をほぼ完全に調査したことから、総点数で50万点をこえるおびただしい量の遺物が出土し、また木製品など良好な状態で出しました。

中でも国内に例のない木胎漆器・蓋(縄文時代晩期)、国内最古の木製鍬(縄文時代晩期)、県内初の土偶(縄文時代晩期)、県内初の東北地方の大洞式土器(縄文時代晩期)、県内最大規模の古墳時代祭祀跡(古墳時代前～中期)などの注目すべき発見が相次ぎました。

今回の展示では、全体1～5区のうち1区の出土品を中心とし、数々の注目すべき発見にともなって出土した、土器・石器・木製品・動植物遺存体など、居徳遺跡群の多くの「語りべ」を一堂に集め、その中に個々の注目すべき資料を位置付けて公開します。

企画展図録

「おばあちゃんの見た山村の80年」
九〇〇円(送料二四〇円) | 税込

出版物の1冊内



(歴民館日録)

月日	出来事
10・13(金)	企画展 「おばあちゃんの見た山村の80年」開幕
21(土)	民俗講座①「土佐民俗学入門」
28(土)	史跡めぐり 「新発見考古学速報展2000を見る」
11・18(土)	史跡めぐり 「香我美町山北の棒踊り」
25(土)	子ども歴史教室「こんにくづくり」
12・9(土)	「ワラ細工」
23(土)	土佐民話の家⑤「正月の話2」

《ひとこと》

企画展「おばあちゃんの見た山村の80年」のおばあちゃん春子さんのご主人の直喜さんが十二月十八日に亡くなられました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

新年明けましておめでとうございます。(梅野)
今年も歴史民も十周年を迎えます。これまで以上に県民の皆様にあいさすされるよう頑張りますのでよろしくお祈りいたします。(職員一同)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第38号

平成十三年一月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1

TEL 0888(8662) 22111
FAX 0888(8662) 21110

開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)
あたる場合は翌日(12月28日)

入館料 通常期「常設展」大人(18歳以上)450円
団体(20人以上)360円
高校生以下は無料

療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳所持者とその介護者(1名)、高知市及び高知市長寿手帳所持者は無料

印刷・共和印刷

<http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/rekimin/>